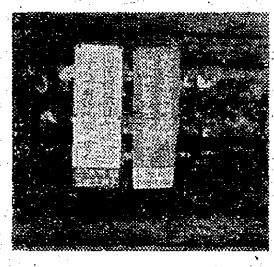
原告団

遺族・CO裁判、災害責任追求、特集号

第五十一号

写真上＝社宅の庭の植木や盆栽に灌水する松本さん。勤めから帰ってからのきまった日課の一つ。こんなところは、どこからもCO患者とは思われぬ。が、左の松本さんのメモ帳の一ページが、彼の内面にかくれている悲劇を語る。写真は、彼が好みのテレビ番組のひかえ。新聞からうつしとったもので、これだけ準備しとかないとわからぬ。

CO患者――松本重則さんの実態



不安背負って歩く道

――たたかいが、かろうじて夫の命をささえる

今も置いている〝坑内帽〟

わび住まい

松本重則さん（49歳）。CO患者。

障害補償給付七級を受給。

かっては、三川鉱坑内電気工。いまは、造成職場の新港作業所で電気機具のサビ落しや塗装などの雑仕事。その賃金、四月の実績は二十六日働いて総稼ぎ高九万九千五百円也。いろいろ差し引かれ、実際に手に渡ったのは八万六千五百円だった。

住まい、大牟田市新港町三川鉱社宅六番地三十八棟。二戸を一戸に改造したから、炭鉱社宅にすれば広い。

妻の名―カツキさん（45歳）。ゆく先不安なCO患者の家庭をささえるため、もう昭和四十年から隣りの街―荒尾市南足尺にある有明共同食品で働いてきた。有明共同食品といえば聞こえはよいが、実のところお豆腐屋さん。カツキさんはそこで、もっぱら〝揚げ〟製造を受けもつ。

子どもは二人。二人とも女で、看護婦として自ら選んだ道を確実に歩いている。

長女光代さん（23歳）が京都の洛陽病院に勤務。とはいえ、彼女は何もこの病院で白衣を着ているわけではない。大阪商船の大タンカーの看護婦として乗り組み、ただいま（昭和五十年六月現在）ペルシャ湾上にある。

次女は京子さん。この方は、名古屋の楠病院（総合病院）勤務。

したがっていま、新港町の社宅に住んでいるのは夫婦二人きり。

「子どものどちらかでも、せめて九州内にでもいてくれるといいのですけど……」、とは妻のカツキさん。やっぱり、わびしさはかくしきれないふうだ。

たずねてゆくと、二人の住まいは整頓が部屋の隅々までもゆきとどいていて、何がなし落ちついた風情をただよわしてはいたが。

再び病院へ

あの日、カツキさんはいち早く三池労組の三川支部へかけつけた。坑内電気工として、その日もまったくいつもと変りなく出勤していった夫の重則さんの安否が気づかれたから。

たしかに、近所の主婦たちといっしょに家をかけ出していったはずだが、さてだれだったかさっぱり記憶がない。頭が混乱していたのに違いない。

そこに、余程ショックだったのだろう、これだけはおぼえているというが、現遺族会会長の溝口生松さん（二人の子どもの命を、いちどにうばわれた人）からいわれたものである。

「あああたのところで主人さんも、恐らくもうダメばい」

事実、見舞い客がやってくるとそれがだれだかわかるのだが、その人が帰ってしまうと、すぐその後で「いまの人はだれ？」と聞いても、早や記憶は消えていた。

子どもとつれだって社宅のフロにいって帰ったばかりなのに、だれとフロにいったのか、もうわからなかった。

家に帰ってから三日目の十四日には、再び天領病院にひっ返した。

燃える怒り

「脳波異常。表情不活発。態度不活発。疲れ易い。物忘れ。思考困難。知能障害著明」

それは昭和四十二年一月八日のこと、平田宗男医師は、松本さんのCO中毒症についてこう診断をくだしたあと、次のように結論している。

「入院継続を要する」

ところが松本さんは、それに先だつ前の年の十月二十六日にすでに、自民党政府の手で、それまで彼の療養生活をかろうじてささえてきた、労災補償を打ち切られたのである。

「松本さんのCO中毒症は固定したから、これ以上医療効果が期待できない」

というのだった。

三井鉱山と政府の仕打ちに対する怒りは湧き立ち、その以前からの要求だった「CO患者を救済するためのCO特別法をつくれ」の声は、ついにはげしいたたかいとして燃えあがった。

四十二年の七月、たたかいはついにCO患者家族の会七十人の、三川鉱坑底での決死の座りこみにまで発展。カツキさんも、そのなかの一人だった。

ところどころに、電灯が薄ぼんやりとともされている以外は、お互い同志の顔の見分けもつかぬ真っ暗な地底の一地点。

分け合うコップ一ぱいの水で口をゆすぎ、顔を洗った百四十四時間（六日間）。

女の身。ときにはくじ折れそうになる自分を、彼女たちは内心に燃えさかる三井鉱山と自民党政府への怒りでささえた。

カツキさんの場合は、それとともに子どもたちの暖い力添えがあった。

その一つ――下の子の京子さんはそのとき、中学一年生だったが真っ暗な坑底でがんばっている母に対し、坑底突入三日目の日に次の手紙を書いて送った。

「坑内は暗いですから、大きな字で書きます。私たちは、毎日元気に学校へいっていますから、心配をしないで下さい。お母さんはきっと苦しいでしょうが、元気でがんばって下さい」

この手紙を、真っ暗な坑底で、たずさえていた懐中電灯で照らしながら、一字一字読んでゆくカツキさんの両眼からは涙があふれつづけ、しばらくは読みすすむことができなかった。うれしかったのである。

その後うちつづいたたたかい。

不安続く道

その後松本さんは天領病院を退院。坑外の軽作業に職場復帰。前記新港作業所に社宅の住まいから通勤する身となった。

ところが待っていたように腎臓結石が出、入院して切開手術を受げること二回。今も右横腹に手術のあとがなまなましい。

そんな松本さんだが、今もちゃんと白い三本線（団結、抵抗、統一の信条をあらわす）入りの坑内帽や、坑内作業着、それに工具類を大切に保管している。

「いつかは元通りの健康をとりもどして、もう一度坑底で働くときのくることが、最大の願いだったから」だ。

でも、今のような体では、本人より妻のカツキさんにとって、やがてくる重則さんの停年後への不安の方が先に立つ。

そんな妻のカツキさんのせつない思いを知るや知らずや、重則さんは家にある限り、テレビのチャンネルをひねりながら好みの番組を追いかける。停年後、人なみの仕事のできるわけがない。

思いがけない不幸を背負いながら、不安限りない道を歩いているこの二人の親たちに、せめてものよろこびは、いつまでも変ることのない娘たちの心やりだ。

電話をかけてきたり、お金を送ってやったり……。

「子どもたちの心づくしがうれしくて……」、と目がしらをおさえるカツキさん。自分のたんじょう日には絶対に欠がすことなく、子どもたちからチョコレートなどのお菓子が贈られてくるという。

不幸が大きいものだけに、うれしさを百倍にしているものか。